

いま、語りつぐ

平和への願い XV

「平和を願う市民のつどい」
「終戦記念日のつどい」の記録



宝塚市平和モニュメント「火の鳥」



終戦記念日のつどいの様子

いま、語りつぐ 平和への願い XV

令和2年（2020年）2月発行

編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課

宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141(代表)

宝 塚 市

発行にあたって

目 次

我が国は戦後 75 年目の節目を迎えました。幸いにもこの間、我が国には戦争がなく平和な社会が続いています。しかし、地球上では依然として人類同士の悲しむべき争いが絶えず、地球上の全生命を滅ぼすことのできる破壊力を持つ核兵器が蓄積されてきました。

宝塚市は、平成元年(1989年)3月7日に「非核平和都市宣言」を行い、平成15年(2003年)9月19日には「宝塚市核兵器廃絶平和推進基本条例」を施行し、これらの理念、規定に基づき、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民とともに毎年様々な平和事業を行っています。

平成30年度(2018年度)の平和の催しの中から、「平和を願う市民のつどい」での平和の語り部の久郷ボンナレットさんの講演と平成28年度親子記者の向井和さんの平和のスピーチ、「終戦記念日のつどい」にて朗読していただきました小室凜さん、児玉奈々佳さん、菅原陽菜さんの作文を本冊子にまとめました。

平和を願う市民のつどいでは、久郷ボンナレットさんに、「世界には『生きるために命をかける子どもたちがいる!』と題して、カンボジアのポル・ポト政権下での過酷な体験と、平和に対する思いについてお話しいただきました。また、向井和さんには、小学校4年生から6年生の3年間に、平和について考え、活動してきたことと、平和のために取り組みたいことについて発表いただきました。

本冊子作成に当たり、久郷ボンナレットさん、向井和さん、小室凜さん、児玉奈々佳さん、菅原陽菜さんのご協力に心から感謝申し上げます。

今年は国連において核拡散防止条約の再検討会議が開催されますが、先が読めない世界情勢の中、今一度原点に立ち返り、核兵器のない平和な世界の実現という願いをかなえるために、私たち一人ひとりに何ができるのか、市民のみならずとも考え、着実に歩みを進めてまいりたいと考えております。

この平和冊子を一人でも多くの市民の皆様にお読みいただき、戦争と平和、命の尊さについて考える一助になることを願ってやみません。

1 平成30年度「平和を願う市民のつどい」記録	1
第1部 平和のスピーチ	1
第2部 講演会	5
2 平成30年度「終戦記念日のつどい」記録	19
平和のメッセージ『これからやらなくてはいけないこと』	20
平和のメッセージ『私達同世代が伝えていかなければいけないこと』	22
平和のメッセージ『ただの海じゃない』	23
3 非核平和都市宣言文	24

令和2年(2020年) 2月

宝塚市長

中川 智子



平和を願う市民のつどい

と き 平成30年(2018年)7月30日(月)午後2時開演

ところ 宝塚市立文化施設 ソリオホール

第1部 平和のスピーチ

『ぼくの平和についての三年間の活動と、これから』

平成28年度「親子記者」 向井 ^{のどか}和

みなさんこんにちは。僕は、宝塚市立山手台中学校1年生の向井和です。今から、僕が話すことは、僕が3年前から今まで続けてきた平和への活動についてです。このような場で、僕のような子どもが話をすることで、ここにいる皆さんに何を伝えられるか分かりませんが、僕が活動してきたことや考えていることに少しでも興味を持ってもらえたり、面白いと思ってもらえたら嬉しいなと思います。

僕の話の最後には、皆さんに質問を投げかけたいと思っていますので、ここは涼しくて気持ちがいいですが、最後まで眠らないように、聞いていてくださいね。

僕が小学4年生の時、その年は戦後70年という年でした。そんな節目の年は、戦争について、何か知った方がいいのかもしれないと思っていました。そこで夏休みを使って戦争について調べることにしました。僕はまず、お父さんが紹介してくれた「碑」という本を読みました。これには、当時の広島第二中学校1年生の原爆投下前の日記に加えて、原子爆弾によって亡くなった1年生321人について、残された遺族への取材を基に彼らがどのような最期を迎えたのかが描かれています。その本は、とても怖かったです。怖いから読みたくない、なのに、手が勝手に動くみたいに、次のページを読み進めてしまう本でした。その次に、ひいおばあちゃんに戦争中の話を聞かせてもらいました。僕が本でしか知らなかった「機銃掃射」に実際に遭っていたり、空襲の後はいつも道に人や馬のたくさんの死体がある。というとても恐ろしい体験ばかりでした。僕は、そのようなことはもう起こらないで欲しいと、そのとき強く思いました。ひいおばあちゃんから聞いた話は、ノートにまとめて、この年の夏の自由研究にしました。

その後、大阪にある「ピース大阪」という場所に行きました。そこは、戦争中のことが詳しく分かりやすく展示されている場所です。そこにあった、空襲の疑似体験ができる防空壕に入ると、激しい爆撃音や逃げる人々の声が聞こえ、空襲を受ける感じがまるで本物のようで、心臓が痛いくらいバクバクしたことを今でも覚えています。

そして8月6日には家族で広島に行き、初めて平和祈念式典に参列しました。デモ隊がいたり、式典中に野次が飛んだり、機動隊を見たのも、この時が初めてでした。式典の後、お父さんの知り合いで、被爆者でもあり、僕が広島のおじいちゃんだと思っている新見さんに会いに行きました。その時、新見さんは、僕をドライブに連れて行ってくれました。

現存する被爆した木やお寺、比治山にあるABC C、陸軍墓地、たくさんの所を案内してくれました。正直、その時はよくわからない所もあったけど、後から「はだしのゲン」など本を読んで繋がる場所がいくつかありました。

僕が5年生の時、その新見さんから、手紙で次のような質問が来ました。それは、「あなたは平和という抽象概念をどのように定義しますか」という内容でした。僕はその時とても困りました。その時の僕は、たくさん考えてみましたが、やはり答えを見つけることができませんでした。



ちょうどその頃、宝塚市の広報を見て応募していた日本非核宣言自治体協議会主催の親子記者の近畿ブロック代表として、長崎に行けることが決まりました。親子記者とは、長崎の平和祈念式典に参列したり、被爆遺跡や、いま現在平和への活動をしている人取材し、新聞を作り上げる活動をするものです。僕はこのチャンスを活かして、新見さんの質問の答えのヒントが得られるかもしれないと思い、長崎で知り合った人々や、平和公園にいた人など、知らない人にも声をかけて「あなたにとって平和とは何ですか」と聞いてみることにしました。最初は50人分の答えを集めようとしたのですが、どんどん聞いていくうちに、他の答えも聞きたくなり、最終的に100人の人に聞くことができました。100人いれば100通りの答えがありました。その答えを見て気づいたことは、「平和」は他の言葉に置き換えられるということでした。「平和」は、その人の「幸せ」や「喜び」にも当てはまりました。もし、この100人全員が、他の100人の「幸せ」や「喜び」を認め合うことが出来たら、それが「平和」ということなのかもしれません。100人の人に聞いた答えは、まとめてこの年の夏の自由研究にしました。このとき、長崎市の田上市長と宝塚市の中川市長にも協力していただきました。ちなみに、この時に僕が出した答えは「広島と長崎の原爆の残り火が消えること」です。この時に僕が書いた「原爆の残り火」とは、広島「平和の灯^{ともしび}」や「長崎誓いの火」のことをさしています。この火が完全に消える時、世界中から核兵器が無くなることを意味しています。これらの火に、このような意味があるということを知らない人が結構いるようなので、もし広島や長崎に行くことがあれば、じっくり見てみてください。

僕が6年生の時、ちょうど1年前のこの「平和を願う市民の集い」に参加しました。そ

こで講演をする近藤敏子さんに会いたかったからです。近藤さんには、僕が、親子記者として長崎で、たまたま取材をさせてもらっていました。近藤さんは、生後8カ月の時に、広島で爆心地から1.1キロ地点で原爆により被爆された方です。いまは、兵庫県にお住まいですが、アメリカと日本の大学生を連れて、長崎の平和祈念式典に参列されていたのです。そんな近藤さんと1年ぶりに会うことができ、お話が聞けるということで、楽しみにしていました。講演の中で近藤さんが、「アメリカの人は広島、長崎に来る時、相当な覚悟を持って来ている」と言っていたことが、僕の心になぜか引っ掛かりました。僕は、その言葉が本当かどうか、確かめたくくなりました。お父さんに頼んで、8月6日に広島に連れてってもらうことにしました。そして平和祈念式に参列する、外国の人に話を聞いて確かめることにしました。質問は2つ「何のために、どんな気持ちで広島に来ましたか」と「実際に広島に来てどうでしたか」です。僕は英語が全く分からなかったので、質問したいことをあらかじめ英語でスケッチブックに書き、答えもスケッチブックに書いてもらうことにしました。当日、僕はランダムに外国の人に声をかけましたが、アメリカの人より、圧倒的にヨーロッパの人が多かったです。でも、すべての人が、僕の話聞いて、一生懸命に答えを書いてくれました。そして外国の人24組にお話を聞くことができました。書いてもらった答えを帰ってから翻訳アプリで訳してみましたが、アメリカの人の答えを見ると「過去の出来事を自分の国がやったこととして受け入れた上で、日本人と同じように悲しんでいる」ということが分かりました。また近藤さんが言っていたように、「恥じらいの気持ち」「重く悲しい」という言葉も見られました。外国の人の答えには「知りたい」「学びたい」「理解したい」という意見と、「願う」「祈る」「希望する」という意見が多くありました。この「知り、学び、理解する」と「願い、祈り、希望する」ということは、平和を築くために必要なことなのではないのかと思いました。そして、この24組の外国の人に聞いた答えは、まとめて、この年の夏の自由研究にしました。

僕は、その後、英語を学び始めました。広島で外国の人にインタビューをした時、英語が公用語でない、スペインやイタリアやフランスの人など、みんな英語で答えてくれました。僕はそれを見て、すごいなと思ったし、僕もそのような人になりたいと思いました。もし、その時に僕が英語を話せていたら、もっといろんなことが聞けたかもしれない、とも思いました。だから、すぐに英語を勉強し始めました。

また、僕は近藤さんの話を聞いて、心に引っ掛かる言葉があり、そこから、6年生の自由研究を自分なりに完成させることができました。自分の心に引っ掛かるものがあるかも、と思う機会があれば、今後も出向いていきたいと思っています。そして、自分の心に引っ掛かることに出会ったら、自分なりの答えを探そうと思うようになりました。その第一歩として、僕は今年の2月にICAN国際運営委員の一人である、川崎哲さんの講演を聞きに行きました。講演会の後、僕は川崎さんと直接お話をすることができました。さらに僕の質問にも答えてくれました。そしてより、英語の必要性を実感しました。講演会の内容は、小学生だった僕には難しすぎて、心に引っ掛かることはありませんでしたが、講演会

に行ったことは、とてもよい時間になりました。今後もこういう機会には、自分から出向いて行こうと思っています。その講演会は、広島原爆資料館であったので、新見さんもかけつけてくれて、川崎さんに僕を紹介してくれました。

僕にとって「英語を学ぶこと」と「出向いていくこと」、この2つは、平和に繋がられるかもしれないことです。一見、「平和」と関係ないように思われますが、僕自身が自分の経験を通して見つけ出した答えなのです。

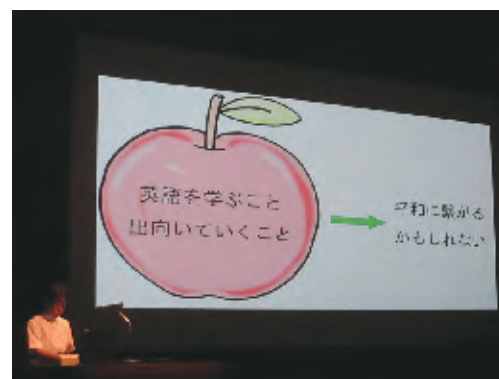
僕の好きな池上彰さんが、こんなことを言っていました。「人は微力ではあるが、無力ではない」僕はこの言葉が大好きです。何もしないと「微力」すら生まれないということだと思います。

さて最後に、僕から皆さんに質問です。「あなたにできる、平和に繋がる、かもしれないことは何ですか？」考えてみてください。今日お配りした資料の中に入っている「かもしれないの実」に書いてみてください。そして、ロビーにある「かもしれないの木」に貼って帰ってください。「かもしれないの木」には、いろんな人の「かもしれない」が集まっていくので、どんなものがあるか、ぜひ見て帰ってください。いろんな人の、いろんな「かもしれない」を知ってください。僕は色々な意見を認め合うこと、すなわち、多様性を認め合うことが「平和」そのものだと思っています。お家に帰ったら、家族の人ともお話ししてみてくださいね。

最後になりますが、僕が小学4年生から今まで、平和について活動をする中で、たくさんの方の時間を使ってたくさんの方と出会い、読んだり、書いたり、調べたり、考えたり、発表したり、様々な経験をすることができました。そして今、僕がこんな大きなところでスピーチができるのも、きっかけをくれた広島の新見さんのおかげだと思っています。新見さんにはこの場を借りて、感謝を伝えたいと思います。ありがとうございます。実は、僕のこのスピーチを聞くだけのために、新見さんが、広島からわざわざ来てくださっています。新見さん、どこにいますか？（拍手）いつも、ありがとうございます。

僕の話は以上です。今僕の話聞いてくださっている人は、最後まで寝ないでくれて、ありがとうございます。

Peace to the world. And make people happy. Thank you for listening to me till the end. Thank you.



第2部 講演会

1 講師

久郷 ポンナレットさん（平和の語り部）

2 講演テーマ

世界には「生きるために命をかける子どもたちがいる！」

3 講師プロフィール

久郷 ポンナレット



1964年カンボジア・プノンペン生まれ。ポル・ポト政権による暴政下で両親、きょうだい4人を失う。1980年来日。その後、苦学して小学校・中学校及び湘南高校通信制を卒業。日本人男性と結婚し、日本国籍取得。

「色のない空」「虹色の空」のカンボジア語版執筆。英語・フランス語に翻訳される。テレビ・ラジオ番組への出演多数。

4 講演の記録 『世界には「生きるために命をかける子どもたちがいる！」』

宝塚市の皆さん、こんにちは。本日は暑い中お越しくださいまして、本当にありがとうございます。そして、このような大きなイベントに、遠い異国から参ったものにお声をかけてくださって、本当に光栄でございます。先の向井和さんのお話を聞かせていただいて、こんなに立派なお子さんが喋った後で、先方があまりに上手過ぎて喋りにくいのですが、相手が日本人ではどう競争したって、日本語は相手が上手に決まっていますので、その部分はハンディをください。

私は現在50歳代半ばです。10歳の時に経験したことを元にお話しさせていただくのですが、あっという間の40数年でした。ついこの間のことのような気がいたします。何十年も前のことと思われるかもしれませんが、置き換えてみれば日本も戦後70数年経っている訳です。当時を経験なさった方にしてみれば、思い出したらタイムスリップしてしまう。一瞬、人を引き戻してしまうようなことです。経験した者にとっては、一生ずっと自分の歴

史として、刻み込まれているのだと思います。

前置きが長くなりましたが、今日は皆さんが、ご一緒にたどっていただけるように写真をたくさんまとめてまいりました。どうしても私は、感情を込めてしまうと、その部分だけで立ち止まってしまって、話がどんどん広がってしまって、最終的には何を言いたいのかが、自分でもよくわからなくなったり、話すのが正直あまり上手ではありませんが、その時その時の感情、心境なども交えながら、話を進めさせていただきます。まず一緒にスライドをたどって行ってください。

これは私が10歳の時に体験したカンボジアの内戦を元に、作ってみたスライドです。皆さんの10歳の時を、思い出していただけたらと思います。やはり10代というのが、大人になったり、思春期になったり、もしかしたら人生で一番楽しい年代じゃないかと思うんですよ。全てが新鮮で、何かと未知の世界とか、希望とか、夢とか、どんな大人になろうかという年代だと思います。しかし、今となって考えてみれば、私の10代は、ほとんど奪われてしまったのです。平穏な日常でも、やはり時には、病気、ケガ、自然災害まして戦争。日本は、何十年も戦争に関わっていませんが、はたしてそれが永遠に続くかと言えば、それは誰も保障してくれません。そして誰も断言できません。日本で戦争が絶対に起きないということはありません。先ほど、向井さんが子どもの目線で平和の大切さを語ってくれましたけれども、本当にここにいる大人たちで「絶対に戦争は起こさないからな。安心しろよ。」とどれだけの人が、自信を持って子どもたちに言えるかと考えれば、私も正直、自信がありません。



家族の半分以上を奪われてしまい、これ以上のつらい事ってないですよ。私の場合は、子どもの目線から見た当時の戦争ですが、大人たちはそれなりに大変だったと思います。

子どもたちにとっては、未来を奪われ、希望を奪われ、家族を奪われ、最終的には命まで奪われたという。かろうじて命があったからこそ、こうやって日本に居れるし、これからも居続けるような気がいたします

朝日新聞の取材で、記事が8月7日に出るかと思いますが、記事の最後に「自分が亡くなった時の心境」が書いてあります。私もすでに死のことを考えている年齢でございます。先ほどの向井さんの話の中で、平和とは何ですかと色々な人に聞いていましたが、私もこっそり答えました。私にとって、平和とは「大好きな家族と一緒に暮らせる平穏な日常がある。」とお答えさせていただこうと思います。平穏な日常を奪うのが戦争です。私も鉄のハートをもっているわけではないので、ああダメだと思ったり、かと思えばやっぱり生きなきゃと思ったり、理由なく微妙な心境の変化があり、その時その時の自分があったのです。とにかく、その日その日生き延びようとするだけで精一杯でした。

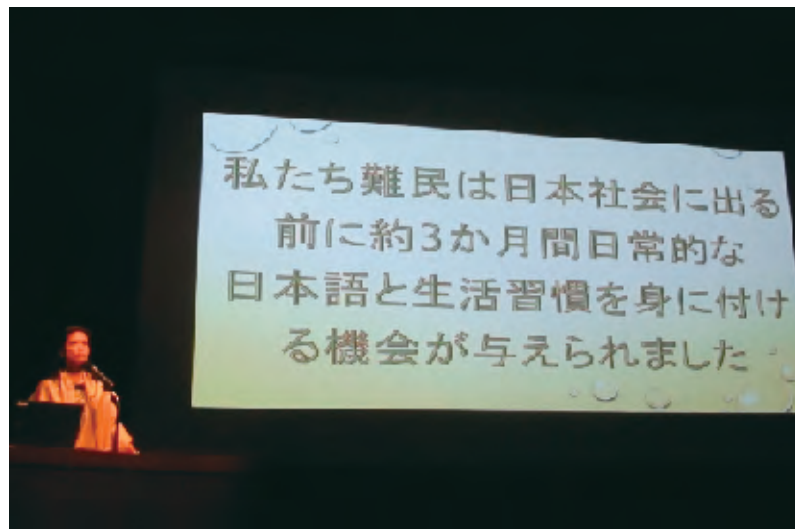
これが10歳の私でございます。大人の目線からは、なんだ子どもじゃないか、何もわかっとらんと思われるかもしれませんが、実は嫌な記憶というのは残るといのが、今となってはわかりました。でも大人から見たら、どうせ何も覚えてないだろうという感じなのが、とても怖いんです。子どもは小学校中学年になれば、人格が出来上がっているとお考えください。たまに、子どもは「ぼく、子どもだもん。」と上手に甘えますが、実は善悪がちゃんとわかっているんですよ。そこに大人はだまされるのですが。私自身も当時、大人たちがやっていることをずっと観察してしまっていて、何で大人たちはよくこんなことが出来るなあ、何で子どもをいじめるんだと観察はしているが、自己主張も権利も何もかも奪われていた時代です。どうすることも出来ず、ただ黙々と黙っているだけの27キログラムほどの私でした。短い間ながらも、8人兄弟の7番目でしたが、両親は愛情を100%注いでくれました。100%を8人で割るのではなく、それぞれに100%ずつ注いでくれました。うまく両親の機嫌をとれば、120%ももらったような記憶があります。

小学校4年生から当時のカンボジアでは、フランス語の授業がございました。私も二箇国語を喋りたくて、一生懸命勉強しました。しかし、内戦が起きまして、私が楽しみにしていた学校生活でのフランス語の授業が二度と受けることが出来なくなりました。少し簡単にカンボジアの歴史についてお話ししたいと思います。皆さんの中でアンコールワットにいらっしゃった方おられますか。あんな大きな物を数千年前の人間が素手と知恵だけで作りあげてしまうということが、我ながら誇らしく思います。しかし、ポル・ポト時代の約4年間で全てのカンボジアのイメージがくずれてしまいました。と同時に70年代にさかのぼると、ベトナム戦争あたりから土台がグラグラしてしまって、私が物心ついた頃から、政変とか、常に武力で政権交代していたような記憶がございます。

昨日のことですが、カンボジアで形だけの総選挙が行われました。形だけと申しますが、最大野党をつぶし、その党首を刑務所に入れ、昨日迎えた総選挙では戦いもせず「オレがチャンピオンだ。」と1人で勝手に騒いでいる。私はあまりに情けなさすぎて、あえて新聞は見ませんでした。結果はわかっています。何があっても彼は権力の座からおりない。70歳になっても80歳になっても、やるんだということです。そして息子さんへの後継ぎとしての準備も進められています。なんとも不思議な、民主主義とは名ばかりのカンボジアになってしまっています。私は日本国籍を取らせてもらってはいても、カンボジアを嫌い

にはなれません。同時にどうすることも出来ない自分があったり、けれどもこれ以上捧げるものも何もないという。

暴力を繰り返した結果、結局ポル・ポト政権時代が一番大きなダメージだったわけです。その約4年間に数百万人もの犠牲者が出たのです。1人ひとりの命の重みというのが、200万人、300万人と簡単な数として無かったことにされています。頭蓋骨だけが飾られているわけですよ。だからやり方があまりにもずさん、言い方を変えますと、あの時代に私も亡くなっていたら、見せ物にされているわけですよ。先ほど広島の話がありましたが、私も広島へは講演で行く機会がございまして、原爆資料館に立ち寄る時間がありましたので、そこでは、ちゃんと作品として展示されております。カンボジアの場合は骨をまるごと展示しております。人の骨を見せてどうするという感じですけども、それが今の政府のやり方なんですよ。何とも残酷としか言いようがないですよ。



後半に話しますが、私は政府のやり方には、遺族としてやりきれないので、要望書を渡しましたところ、当時の物的証拠として、大切に保管するんだという返事がありました。とんでもないですよ。当時、無差別虐殺、強制移住、そしてあらゆる禁止令、例えばお金を遣わせなくする、教育制度をなくす、こんなこと聞いたことがありますか。人材を育成するには教育であると世界中のみんなが知っているのに、当時のカンボジアは廃止してしまうんですよ。あるのは洗脳教育だけで、ただ言葉で吹き込むわけですよ。一番怖いのは、宗教を信仰すること自体を廃止することです。

もちろんカンボジアは仏教の国ですが、少数派ながら、キリスト教やイスラム教の信仰者もおられます。ずっと仲良く共存していましたが、全部信仰が廃止されると、宗教が無いから人を殺しても地獄に落ちないよと洗脳教育を行うのです。

これがインターネットで見つけた当時の強制移住の写真です。このように人々は、いきなり住んでいた町から一斉に追い出されます。そして私たちが住んでいたプノンペンという大都市を無人の都市にしてしまう。無人というのは私たち住民のことだけで、当時の幹

部たちは、政治の本部として色々なことをしておりました。30代前半の父の写真です。父は国家公務員だったのですが、ポル・ポト時代は一般知識人が虐殺の対象でしたので、父も早い段階で虐殺されたと思われまます。言葉巧みに、強制移住は3日間という約束でしたので、人々はそれに合わせて家を出るわけです。早い話、私たちが子どもたちを夏休みのキャンプへ2泊3日、3泊4日で行くとき、さあどれくらい食料を用意しようか、着替えも3着あればいいかと、その程度です。しかし気付いたら、家から追い出され、知らぬ土地で親・兄弟と一緒に住むことも許されません。集団生活・集団労働というような制度がとられました。365日土日祝日なしで、毎日の長時間の強制労働と疲労と栄養不足、3日分の食料が無くなって、お金もない、そして物々交換も犯罪です。見つかったら罰則され、処刑されるかもしれない厳しいものでした。そして当時のスローガンですが、「働かざる者食うべからず」それを私は置き換えて「生きるべからず」それはどういう事かと申しますと、生かしておいても社会の利益にならない、殺してしまっても社会の損失にならないというスローガンが高々と平気で謳われていました。ですから、私たち特に移住した住民たちはビクビクです。いつ自分がその立場になるのかと。肩をトントンと叩かれれば、それでアウトです。裁判も何もありません。その過酷な環境に耐えられなくなれば、死が待っている。どちらにしても、死ぬ確率が高いということです。後になってわかったことは、プノンペンから移住してきた住民を皆殺せというのが、最大の目標だったようです。当時私は10歳の子どものみでしたから、親との別れの寂しさ、おまけにお腹が減るといのが辛いですよ。よく、日本の年配の方から、お芋を見たら戦争中を思い出すから嫌だとよく聞きますが、私にしたらお芋が食べられるなんてすごいじゃないですかと思わず言いたくなるのですが、水を差すよう言い出すことはできません。早い話、命の尊厳が全く無い時代でした。身体的なものは食べ物が支えてくれますが、精神面は食べ物だけでは満たされません。私にとって精神面で支えとなったのが、半年に一度程度、母に会えるという楽しみです。その母が私たちのことをとても心配してくれて、当時、紙もペンもない時代でしたので、お母さんに会いたくなったら心の中で思い出してねと、一生懸命オリジナルのお経を作ってくれたんですよ。最後に心の支えになったのが、生き延びればやがて幸せがやってくるだろう。生きてさえいればという事なんですよ。当時の子どもには神様が本当に居るのが本当に疑問でした。本当に神様が居るのなら、どうして子どもたちをいじめるのですか。とりあえず、生きていけばという事で神様は無視します。そして絶対に生き延びようと心に決めました。仕事はきついし、ごはんはまともに食べられないし、カンボジアの太陽は本当に高いんですよ。真上に来ると、自分の影を自分で踏んでしまうくらいの高さです。だから日中は肉體労働をさせられていました。どんな労働をしていたのかということですが、色々ありまして個人が持っている田んぼ・あぜを全部とっばらって1ヘクタールずつに作り替える。それに田植え、収穫が終わると、半年に一度母に会いに行けるという区切りなんですよ。それが終わると森へ移動し、わざわざ開拓して、そこにキャッサバというお芋を植えたり、またはいつまでたっても終わらない仕事、国道沿いでの大きなダ

ムの建設です。とにかくやる仕事はいくらでもありました。先ほど申し上げたように、病気になるたら、先ほどのスローガンのようにはめこまれてしまうのです。ですから、みんな黙々と仕事をしていました。パテた者から命を落としていくという感じです。当時のカンボジアは2つに分かれていましたが、実際には移住していた私たち都市住民が地方へ、ポル・ポトたちを指示する側の村に行って、その家に1家族ずつ振り分けられ、そこで私たちは監視され、いわゆる囚人と看守のような関係です。それこそ罪人のような扱いで、何をされても何を言われても応える権利はありません。そして住民の方が「お経をあげていたよ。」と密告すれば、信仰心をまだ持っているとして、罰則です。常に事細かく監視されます。早い話、ポル・ポト時代がいかにもむごい時代でも、必ず支持する人が居たから、4年近くもったという事ですよ。そこが怖いなと思ったんですね。これはカンボジアに限らず、どこの国でも自分たちに都合のいいことはこのままであって欲しい。今のカンボジア総選挙もそうですが、今のフン・セン首相を支持している人たちがいるから、もっているわけですよ。でもやっぱり、貧富の差があって、賄賂が無いと大学を出てもなかなか就職口が無かったり、日本でいうと、二世タレントのように、自然とテレビに出してもらえらるようなものです。そして気付いたら、10人家族が1人ずつなくなっていきます。最初に父が亡くなりましたが、母もやはり、小学校教師をしていましたので、知識人として虐殺の対象だったわけです。ただ一緒に1番下の妹がおりましたので、先方も殺す機会を窺っていたのではないのでしょうか。最終的には、3女の姉も集団労働現場から戻ってきて、身体をこわして母と妹と一緒に居ることになったのですよ。ちょうどその頃に3人とも一度に真夜中に連れて行かれたと、後になって聞かされました。

申し遅れましたが、私のきょうだいは、女・男・女・女・男・男・女・女、すごくないですか。今の日本では1人とか2人とかです。母は8人の子どもを産んで、教師を続けながら弱音一つはかずにいつも笑顔をくれました。それが私の中では後に自分が愛されていたと心の支えになり、救われました。私が日本に来る大きなきっかけを作ってくれたのが、一番上の姉です。姉はポル・ポト政権が始まる1年前に、日本の国費留学生に女性で初めて選ばれたエリート中のエリートです。2番目の兄も優秀でしたが、7番目の私は何も期待されておりました。上の方が優秀で、下に行くほどDNAが薄くなるのでしょうか。ただ自分の努力不足かもしれませんが、とにかく上のきょうだいは優秀でした。姉は優秀な学生としてお給料を頂きながら、ただで勉強が出来る、我が家は裕福ではないので、そういう優秀な子どもがいると、両親も助かるのではないのでしょうか。我が家で亡くなった6人のうち、私が実際に死を確認できたのは、3番目の姉だけです。ポル・ポト時代に亡くなった人で、みんなに見守られながら埋葬してもらえたなんて、なんてラッキーな人なんだろうと思います。この笑顔の写真のわずか二箇月後に亡くなったんですよ。最初はお腹が痛いと言い出し医者にも行けずに、そして不思議なことに「日本に居る姉が飛行機で私を迎えに来ている」と言うんですよ。亡くなる直前まで幻想を口にして、あの時代生き延びる確率は低いですね。だから17歳の娘を看取った母はあえて、なんて幸せな子なのだろう

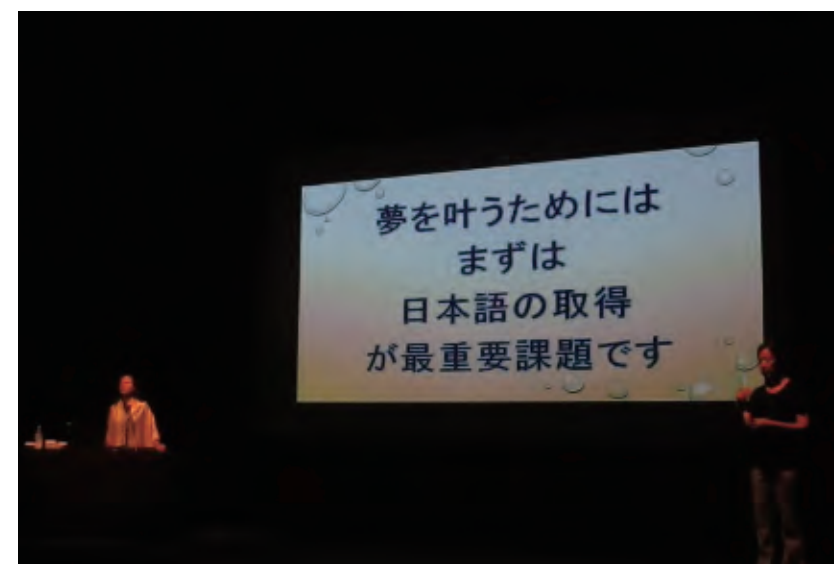
という言葉を残してくれました。2番目の兄は、ちょうどフランスへの国費留学生の試験を控えていました。我が家にとっては、一番上の姉の次の期待の星です。後にわかったことですが、中学生以上は知識人と見なし、虐殺の対象となったわけですが、どのような形で連行されたか、いつの間にか私の前から居なくなってしまいました。3番目の姉は、身体をこわして村に戻り、母たちと連行されました。最終的には、2男の兄、3男の兄だけが生き残りました。先ほども言いましたように、食べ物身体的にも精神的にも必要不可欠ですが、当時はそのどちらにも欠けていたのです。



家主のおじいさんに3人は連れていかれたよと聞かされ、ああ虐殺の対象だなと気付きました。と同時に、他の兄たちはどこに居るのかもわからず1人でしたので、ここで初めて、もうダメだと生きることを諦めました。おまけに伝染病もすごくて、4年もの間、シャワーも着替えもない状態でした。野良犬だったらノミが発生します。人間はノミだけでなく、シラミも発生します。同時に母たちが居なくなって、私はもういいや、これ以上踏ん張ることは無いと思い、命を粗末にしているつもりはないですが、もうどうでもいいやという気持ちになりました。やはり生きてるって希望があるから楽しいわけです。周りに人が居るのに、孤独を感じていました。子どもには過酷すぎます。マラリアにもかかり、とうとう気を失いました。そして、いつ死んでもおかしくない人間が収容される場所に連れていかれ、そこで2男と3男の兄に再会しました。兄は兄で私は私で、お互いに死んでしまったものと思っていましたので、再会を喜び合うわけです。兄たちも私と同じように、母たちが連行されたと聞かされ、精神的ダメージを受け、マラリアになって同じように収容されたという経緯でした。日本に居る姉は間違いなく生きているという確信がありましたので、3人と合わせて、4人の兄弟が生きていたということです。収容所で会った同じ年頃の女の子は「あなたはまだお兄さんが居ていいわね。私はひとりぼっちよ。」という言葉を残して、息を引き取りました。彼女は生きていても辛すぎるんじゃないかなと子どもな

がらに思い、亡くなったら天国に行って家族と再会できるんじゃないかと、同僚を亡くした悲しさとあの時代に生き延びることの難しさを実感しておりました。カンボジアのことわざで「一本のおはしは簡単に折れてしまうけれども、一束のおはしはなかなか折れない」、これと同じように、私一人では心は折れてしまうけれども、兄たちと三本のおはしの束になれば、少し固くなるのですね。そうして自分の中で生きる自信が生まれた時に、村の住民からかけられた言葉が「まだ生きてたのか。邪魔だ。さっさと死んでほしい。」私たちの存在自体がうっとおしいんですね。戦争というのは、相手をとにかく死に追い込み自分だけが生きのびる、自分さえよければいいと申しましょうか。

やがてシラミがわいてきました。頭にわくシラミは黒いですが、身体にわくシラミは肌色なんです。この時、私は着の身着のままだったので、さてどうしようと思いました。こんな時、日本の若者なら中学生でも自殺するんですよ。ついこの間生まれたばかりの赤ん坊ですよ。もったいないなと思います。大人が自殺していいと言っているのではないのですが、大人には大人の苦勞があります。でも中学生がですよ。だってよく考えてみてください。ご両親が居て、きょうだい居て、おじいちゃんおばあちゃんも居ますよね。学校の先生も友だちも居て、それでもなお、自分の命を絶つというのが理解しがたい。私の周りには、当時不思議なことに自殺する人が居なかったんですよ。ひとりひとりに生きたいという本能があって、でもお互い手を差し伸べることはできません。だから、踏ん張れるところまで踏ん張ろうねという暗黙の了解はあるのですが、相手をいたわる余裕はありません。とりあえず私たち兄弟は生き延びようと。生きてさえいれば、もしかして幸せになれるんじゃないか。だから漠然と10歳の時に大人になるってどういう事なのかに興味がありました。まず一つ、私は大人になったら、子どもを泣かせないということです。どんなに私が生きるぞ、死なないぞと自分で頑張っても、基本は衣食住が無いとダメじゃないですか。すぐ寝るだけなので、住む場所は木の影でした。着るものは、こっそり池に入ってズボンを脱いでもみ洗いして、また穿いていたら臭いと言われなくなりました。さて食事ですが、トカゲやタランチュラやムカデもいただきました。この時、人間って一番雑食なんじゃないかと思いました。他には、葉っぱや雑草、いざとなったら、自分の命を救ってくれる自然ってすごいなと思いました。食べる物が減ってくると、対象物が段々小さくなっていきます。バッタやコオロギも焼いて食べて、一つ食べるごとに一日命をつないでいける。こんな世の中がいつ終わるかを誰も教えてくれず、誰にもわからないので、とりあえず今どうすれば生きられるか。いろんな病気が蔓延します。なんといっても栄養失調ですね。それでも生き延びてしまったという。そして政変の兆しですね。気が付けば、3年8箇月20日間、生き残ったきょうだいは、みんな骨と皮です。当時の私は、寝ているとお腹と背中がくっつきました。アバラ骨の数も数えられます。今は日本で、おいしいものをいただいて、肉が盛り上がってアバラ骨が無いです。



解放されましたので、さあ皆さん今日から自由です。ふるさとを変えてもいいですと仮に言われます。でも亡くなった長男と連行された母と三女と末っ子の4人は、まだそこに居るんですよ。私は当時まだ虐殺されたと信じたくありませんので、その4人をおいていかなければなりません。それはそれは辛い選択でした。でもそこに居るのも怖いんです。何故かという、生き延びたプノンペンの人たちもみんな引き揚げているので、自分たちだけ、兄弟3人が戻ってくるんじゃないかと、じっと待つのを一週間ぐらい気を遣って待ってくれましたが、これ以上無理と途中まで一緒に引き揚げました。大人たちは私たち3人の面倒をみる人が居ないことに気づきました。そこで一緒に帰ろうとは言わずに、自分たちはこれからプノンペンに戻るけど、君たちはどうするんだ。私はそこで大人って残酷だなと思いました。そこで兄が、僕たちはまだ何も考えていない。皆さんで先に帰ってくださいと言いました。追いつめられる訳ですよ。こんな時に母が居たらと思いました。ついていけばいいんですから。そして、兄たちが結局下した決断は入隊しようというものでした。お国を守ろうという気持からではなく、そこに入ればご飯が食べられるという単純な理由からでした。食べ物が無いというのは、そこまで自分たちを追いつめてしまう。

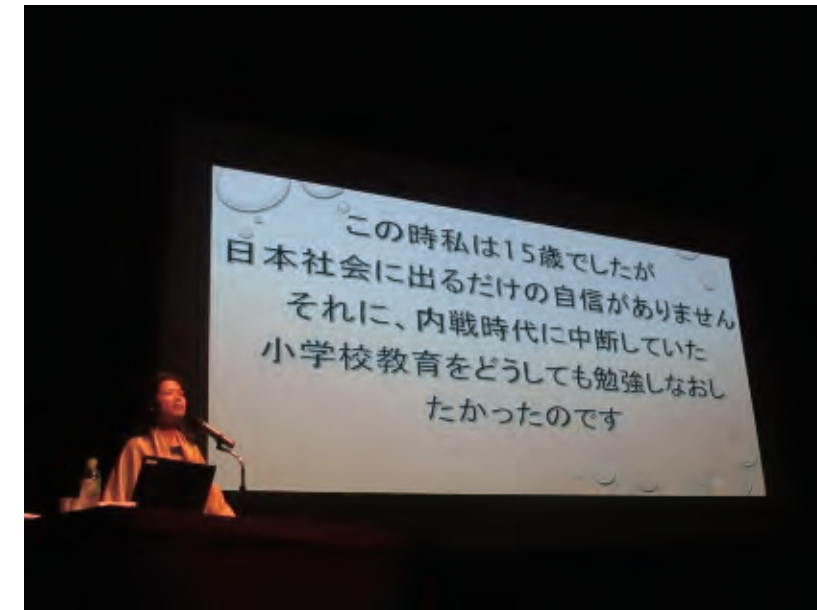
だから私が思ったのは、もし私が生き延びていなければ、もしかして兄たち2人が前線に送り出されて、日本に来ることもなかったし、そして日本に居る姉も家族は全滅でしたと皆さんの前で言ったかもしれません。そんな子どもたちの責任を取ってくれる大人たちが誰もいないという状況で、私が学んだことと言えば、信じられるのは自分だけだということです。もし両親が居れば、100%信頼しますけれども、やはり兄弟だけというのは、兄たちを信頼していましたら、当然入隊していましたし、だから今となって考えればですよ。当時、他にも行き場を失った小さい子どもがたくさん居たはずですよ。そして男の子は入隊した子も居たと思います。当然入隊したら、兄弟と一緒に居られる保障も無くなるじゃないですか。またさびしい思いをして、生きてるんだろうか、死んでるんだろうかという毎日になるじゃないですか。だから反対して、なんとか兄たちが聞き入れてくれました。そ

して不思議なことに、運よく、歩いていたら、老夫婦にうちに居ていいんだよ、好きなだけ居ていいよという本当の無条件の愛情を差し伸べてくれる方が居て、後になって母の遠い親戚に当たるというのがわかりましたが、でも当時の状況で3人の食べざかりを受け入れてくれる大人が居たというのが、大人って格好いなと救われた気になり、こういう大人になろうと目標が出来ました。もちろん食べ物もあまりありませんが、優しさと思いやりで精神面がかなり支えられまして、これまで陥っていた人間不信も少しずつ取り戻すことが出来て、やはりカンボジア人でも捨てたものじゃないなと、幸い日本に渡る前にこういう人に出会えたことが、また私にとって、後にカンボジア人に悪い人は居ないと思える人に出会えて幸運でした。食べ盛りの14、16、18歳の子どもたちに無条件に食べさせること。1年7箇月の月日が流れ、日本に居る姉から手紙をもらいました。1年7箇月というのは、ポル・ポト時代が終わって、私たちが日本にたどり着くまでの間のことです。ですから割と早い段階でしたね。まさか日本に来られるとは思いませんでしたが。ポル・ポト時代は、とにかく生き延びようと命さえ助かれればと思っていました。でも人間は欲張りです。命があっても、未来がなければ。両親とも教育者でしたので、もし生きていれば、何かしらの教育を受けさせてくれたと思うんですね。それを考えた時に、姉の手紙が奇跡的に届いて「生きているなら、タイの難民キャンプに向かうように」と書かれていたと記憶しています。

カンボジアには地雷産業がございません。近隣諸国から安いお金で買って、国境や全土にまく訳です。結局、それを受けるのがカンボジア人です。上の方たちは常に安全な場所にいらっしゃいます。結局、未来を手にするため、日本に行きます。当時、日本へのパスポートやチケットを手に入れて、大使館に行って、さあ飛行機に乗ろうという時代ではなく、とりあえず陸路でタイの難民キャンプに行きます。人、人、人、何万人という人が、ポル・ポト時代が終わり、結局生きることを求めて、ひとりひとりが生きてたくて仕方がないですね。最終的に第三国へ、タイの領土に入れば第二国、そこからチャンスがあれば、第三国に移住という、本当に宝くじに当たるかのような確率で、私たちは幸い身元がはっきりしていたので、当時、身分証明書も何もないけれども、日本に居る姉の証言を元に、難民キャンプで、日本の外務省の担当官と面接し、年格好が合致して、日本に来る許可をいただくという流れです。キャンプの生活はいたってシンプルです。また命を狙われる心配が無いので、ホッとしています。楽しい場所ではないけれども、日本に行けるという希望と夢がございました。

そして晴れて1980年、ポル・ポト時代が終わったのが1979年1月、そして私たちが日本に来たのが1980年8月14日、念願の日本にやってきました。どんなにすばらしい星でも、今度は言葉が私たちをいじめます。日本語という未知の世界。やはり何れともあれ、日本語を身につけないと生活していけません。とりあえず、当時の難民としては、難民定住センターというものが神奈川県にございまして、約三箇月間にわたり日常的な日本語の取得と電車の乗り方や買い物の仕方などの生活習慣を教えてくださいました。そこを出

ると、あてがわれた工場に行きます。当時80年代には仕事がたくさんありました。後になって3Kという言葉が生まれ、その「危険・きたない・きつい」が私たちが喜んで引き受けた仕事です。ポル・ポト時代には、どんなに働いても収入どころか、ご飯さえもらえなかった私たちにとっては、ありがたい、ありがたい仕事だけでなく、住み込みの住宅まで用意してもらって、おまけにお給料も頂ける。家族とも一緒に暮らせる。両親が働いて、子どもたちは学校に行けるという人間の幸せの土台がそこで一から築きあげることが出来るという。3Kを気にしない私たちにとっては、ありがたいことでした。

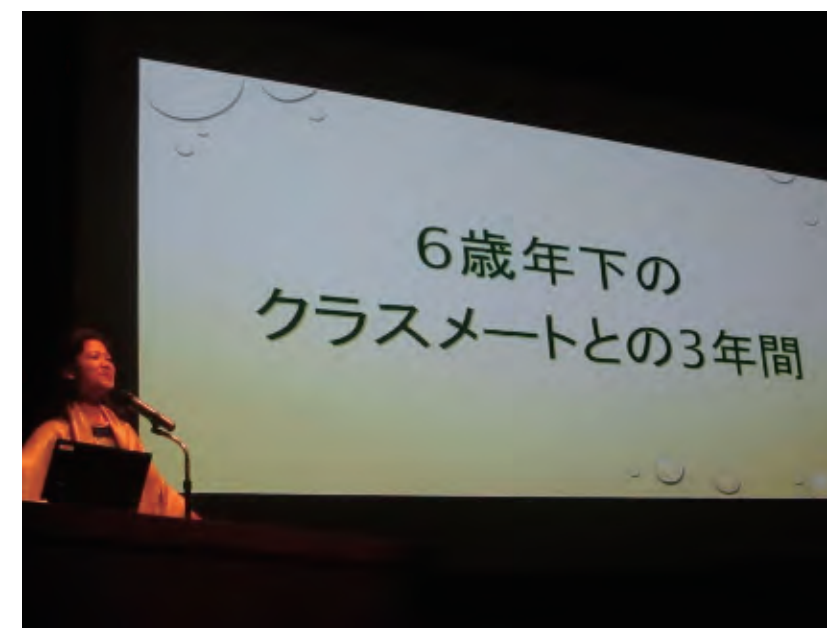


その時、私はまだ15歳で、本来なら義務教育が終わっていて、仕事をする年齢だったんですよ。15歳で働きに出た友だちが何人も居て、当然ポル・ポト時代には教育は、ほとんど受けていないにもかかわらず、本当は日本に来て、教育をやり直したいのに、その期待さえ与えられない。つまり、自立が私たち難民の基本です。日本政府に面接の段階で「迷惑をおかけしません。私たちは自力で自立いたします。」と言える人たちが、日本に来ることが出来るのです。姉は姉で「保証人として、兄弟たちの面倒は私が責任をもってみます。日本政府には、ご迷惑をおかけしません。」と署名します。兄たちは、日本語教育プログラムを終え、すぐに住み込みの会社に入ります。私は生意気にも、もう一回小学校に入りたんだとわがままを言って、かなり周りを困らせました。私の作戦勝ちでした。

16歳で6歳年下のクラスメートたちと学ぶことを許されたんですよ。この3年間があったおかげで、私はここに立っていただけるというぐらい、教育というのはすごいですよ。読み書きですよ。先ほども申し上げたように、もし母が生きていれば、もちろん教育を受けさせてくれたであろう。そして、面倒をみてくれた老夫婦と別れる時も、彼が日本で立派な人間になるんだぞと言ってくれたので、私の中では教育が先なんですね。私は、とにかく読み書きが出来るようになりたかったので、なんとか周りの大人たちの理解もあり、

もちろん、自分から言い出したので後戻りは出来ません。3年間頑張りました。卒業の時に載った神奈川新聞の記事を見た久郷くんという青年から、幸いにも励ましの手紙をいただきました。でも本当に運命のいたずらですね。久郷くんと文通友達になります。ただ日本社会の壁にもぶち当たりました。私たちが日本に来る前に見ていた希望の星、それは日本人にとっては希望の星かもしれませんが、外国から学歴もお金もなく手ぶらで来る人間にとっては、日本は分厚い壁のある国です。どんな事かと言いますと、仕事を探すときに、水商売など夜の仕事に勧誘されたり、または門前払いにあたりました。でも日本政府の厄介になる訳にはいかないので、自分でなんとかしなければ、とりあえず見つかるまで探せばいいやと思っていました。仕事が見つかって、先輩から親近感を持ってですが、ゴキブリみたいに黒いねとふざけて言われたりしました。小学校を卒業したのが19歳、久郷くんと出会って文通しているうちに、大人になっていく自分がありました。10代最後の年に久郷くんと出会ったんですよ。冒頭に私には10代がなかったと申し上げましたが、訂正いたします。10代ぎりぎりの所で少し良い事がございました。久郷くんと文通していると、弱音は吐けないですね。未来が手に入ったのに、更に未来が欲しいと思うようになりました。やっぱり家庭が欲しい。そして4年後家庭を持ちました。結婚式、そして新婚旅行はカンボジアに行けなかったのが、平和だった頃のカンボジアに似ているタイに行きました。そこで不思議なことがありました。久郷くんと一緒なのに、日本政府が何故か私に保証人をたてろと言ってきたんですよ。日本の青年をさらって行っては困る。理由はいまだにわかりませんが、私たち難民は常に不可解な制度にしばられているような気がいたします。もし、久郷くんが日本人女性と結婚していたら、保証人をたてずに、どこへでも自由に新婚旅行に行けていたと思います。そして私たちに可愛い子どもが生まれます。家族でアンコールワットへも行きました。今日は、私が書かせていただいた本を少しですがお持ちしています。実は私は、お話ししたくないから本を書いたんですよ。本を書いたら、お話から逃れられる、ひっそりと暮らせると思ったのですが、本を書けば書いたで、お話をしなければならぬ責任が伴い、結果的に、私は宝塚の皆さんにお会いするチャンスを頂いた訳で、ありがたいことです。そして自分だけが幸せになりましたが、めでたしめでたしという訳にはいきません。

やっぱり心のどこかで亡くなった人たちを常に思っており、何か彼らにしてあげられないかという事で慰霊の塔に行くことを決心しました。加害者の居る現場に行かなければ何も始まらないので、とても勇気がいることでしたが、でもやはり行かなければと行ってまいりました。2005年のことです。ポル・ポト時代が始まった1975年から30年後の節目でした。罪を憎んで人を憎まずと自分に言い聞かせながら行きました。



奥に連行されていく人たちを連日のように見たのですが、戻ってくる人はいません。だから奥に虐殺現場があることを誰でも知っています。慰霊の塔は全面ガラス張り、頭蓋骨とか大腿骨とか外から見えるように飾ってあるんですよ。私は最初に目があった頭蓋骨を母と決めて、「長い間待たせてごめんなさい。ようやくみんなをふるさとへ連れて帰れる時が来ました。」と色々な思いを話しかけました。当時、悪魔のような人でも、30年40年経つと普通の老人にしか見えません。ですから私を助けてくれた老人もこんな姿です。不思議なことに、時代とともに人間も心が弱い。どうにでも変化してしまう。天使にでも悪魔にでもなれてしまう。怖い戦争のなせる業です。体験した者としては、二度とごめんという事です。そして私だけではなく、子ども世代には同じ思いはさせたくないという。大人になった自分が、そのように子どもたちに辛い思いはさせたくないと思える自分になれた。またそういう大人が1人でも増えれば、戦争が無くなるんじゃないかと勝手に思っております。ようやく、みんなを火葬して、ふるさとへ連れて帰って、お墓を建てて、その中に遺灰を納めて、仏像も置いて。そして先ほども申し上げましたが、フン・セン首相あての要望書ですね。返事もちゃんとありました。物的証拠として保管しなければならないので、引き渡す訳にはいきませんということでした。ですから私は、過去の教訓から学べることがあるんじゃないかなと、NHKに呼ばれば、色々自分の体験を語ったり、このように、娘とカンボジアの光と影という舞踊を時々披露してみたり、やはり、私の中の合言葉は世界平和。私一人の力ではどうすることも出来ない、皆さんの意志が同じ思いでなければなりません。ぜひお力添えください。そして、これが久郷くんと長男、長女、私でございます。今このように新たな家族で平塚市にひっそりと暮らしております。おかげさまで本当にありがたいことです。世界には、生きるために命をかける子どもたちがいると1人で勝手に盛り上がり、1人で勝手に思い出話をしてしまったような感じですけども、ご清聴本当にありがとうございました。

終戦記念日のつどい

と き：平成30年（2018年）8月15日（水）午後2時開式

と ころ：市立中央公民館、末広中央公園「平和の鐘」前

主 催：宝塚市 宝塚市平和事業検討委員会、宝塚市原爆被害者の会 宝塚市
遺族会、宝塚ユネスコ協会 ハートフル合唱団

～～～ 次 第 ～～～

- 1 開会
- 2 黙とう
- 3 宝塚市長 あいさつ
- 4 宝塚市議会議長 あいさつ
- 5 平和のメッセージ

これからやらなくてはいけないこと

宝塚中学校3年 小室 凛

私達同世代が伝えていかなければいけないこと

宝塚中学校3年 児玉奈々佳

ただの海じゃない

宝塚中学校3年 菅原 陽菜

平和への願い

宝塚市遺族会会長 川西 武信

- 6 平和の歌合唱

合唱 ハートフル合唱団

青い空は (作詞 小森香子 作曲 大西 進)

長崎の鐘 (作詞 サトウ ハチロー 作曲 古関裕二)

故郷 (作詞 高野辰之 作曲 岡野貞一)

- 7 宝塚市平和事業検討委員会代表 あいさつ

- 8 閉会

～～～末広中央公園へ移動～～～

「平和の鐘」打鐘



平和のメッセージ

これからやらなくてはいけないこと



宝塚中学校3年 小室凜

私は沖縄戦について何も知りませんでした。広島や長崎に原子爆弾が投下されたことなどは知っていましたが、沖縄も同じくらい大変だったということを今回初めて知りました。

私が一番驚いたことは、唯一沖縄は地上戦だったということです。ガマへ行ったり、ガイドさんの説明を聞いたりして地上戦がどんなにむごいのかを知りました。ガマの中はとても暗く、寒くて足場が悪く、二週間も住めるようには見えませんでした。でも外に出るとアメリカ兵が待っていて、火の球が飛び交っている。中にいるのも外に出るのも両方としんどかったと思います。沖縄戦では、日本兵だけではなく、住民も一緒に戦い、奪われるはずのなかった命までもが奪われてしまったことを聞きました。ガマの中にいたら安全だと思っ
ていても、大砲で襲われ、アメリカ軍が中まで入ってきて銃で撃たれる。私もその場にいたらみんなと一緒に自決していたと思います。

チビチリガマでは多くの人が自決をして亡くなっています。あれほど洗脳されていたら生きるのが怖くなります。でも「死ぬなら太陽を見て死にたい。」その気持ちも分かります。ずっと暗いガマの中にいたから、どうせ死ぬなら光を浴びて死にたい。シムクガマの人々はそう思って外に出たところ殺されずに済みました。

実際に二つのガマに入ってみて思ったことは、たとえガマがあつて入ったとしても、そこは決して安全ではなかったということです。空襲でさえも怖い

に、アメリカ兵と顔を合わせるなんて想像できないくらい怖い、もしかするとすぐ後ろにアメリカ兵がいるかもしれないという恐怖の中で必死に生きていたんだと証言VTRや資料を見て思いました。

この地上戦で撃ちこまれた一人あたりの弾の数を見て私はとても驚きました。こんな数なら一步でも外に出れば殺される、「ガマの外に出る＝殺される」のだと思いました。確かに日本兵の間違った洗脳のせいで自決が起きたといってもいいと思います。でも、それだけではなく、このような環境だったということもあって、生きるより死ぬ道を選んだのかと思いました。

私達が沖縄へ行った時は、当たり前だけれども、当時よりは平和でした。海は青さを取り戻し、澄みわたった空がどこまでも広がっている。説明を聞きながら私は「今の日本に生まれて良かった。」と思いました。でも、今の日本が平和とは限らないと思います。米軍基地が残っていたり、原子力を利用していたりと、日本もまだまだだと思います。本当に平和な世界を創るためにも、この地上戦のことを忘れてはいけないと思います。地上戦、戦争の怖さや憎しみ、辛さを一人一人が理解して、犠牲になった命をエネルギーに変えて後世に伝えていくことが大切であつて、一番するべきことだと思いました。

私達同世代が伝えていかなければいけないこと



宝塚中学校3年 児玉奈々佳

沖縄に行って私は、私達世代の人たちがどのように沖縄戦と向き合ったのかを知るために、対馬丸事件、ひめゆり学徒隊について良く考えてみようと思います。

まず、沖縄に行き初めに行ったのは、ひめゆり平和祈念資料館です。着いてまず思ったのは、ひめゆり学徒隊のことをよく知れるようにしようということです。

展示品の所に行くと当時のことを思い出させるような展示ばかりでした。奥に入っていくと亡くなった学徒の写真が並んでいました。一つ一つの写真をじっくり見ていくと亡くなった原因やその方の性格など、たくさん書いてありました。私が印象に残ったのは、一人の女の子の亡くなった時に言っていた言葉です。「お母さん、いつも反抗してごめんなさい。」死んでしまったら何も伝えきれません。そして、戦争中はこんな言葉を伝えるなどできなかったのでしょうか。そう思った方が、戦争中は何百人もいたと思います。

また、対馬丸という疎開船でも同様に、たくさんの私達と同世代の方が亡くなられました。私は一人一人の亡くなられた方が伝えたかったことは何かと考えました。今現在沖縄戦を体験した方は年々減ってきています。だからこそ私達が直接沖縄に足を運び、現地で学んだことを次の世代につなげていくことが私達の役目ではないのでしょうか。

私は沖縄に行き、沖縄で起こった事実を受け止め、戦争がどれほどみじくいな争いなのかを身にしみて感じました。ひめゆり学徒隊で亡くなられた方だけでなく、地上戦で戦った兵士の方もいます。すごく考えさせられるような沖縄戦でした。私達には関係ない、ではなく自分達自身が学び考えないといけない問題だと思います。次の世代へとつながってほしいと私は願っています。

ただの海じゃない



宝塚中学校3年 菅原陽菜

私は沖縄と言われたら「海」を思い浮かべます。その海はきれいで暖かく、人々を大切にしてくれるのだと。

しかし、約七五年前、悲劇は突然起こったのです。それはその「海」にアメリカ兵が見えたことです。アメリカ兵は残酷で「鬼畜」と呼ばれていました。火炎放射器で山を焼き払い、大量の武器で人々を痛めつけました。人々は必死で逃げて逃げて……。そして人々がたどり着いたのは真っ暗なガマでした。人々はそこで生活し、寝て食べていたのです。

「シムクガマ」と「チビチリガマ」という約一キロぐらいしか離れていない二つのガマがあります。そこで生きるか死ぬかを選ぶことになったのです。当時は捕まるなら死ぬという教育でした。

ですから「チビチリガマ」は殺し合いをしました。石などで兄は弟を、親は子をなぐりつけるという方法で殺しました。私はそこで、沖縄の人は生きようとは思わなかったのか、疑問に思いました。沖縄の人は素直だったから従ったのだと私は思いました。

しかし、「シムクガマ」では、集団自決をしないでアメリカに降伏しました。たくさんの日本人が助かりました。私はそれも沖縄の人が素直だったからだと思います。沖縄の人達はみんな素直で良い人ばかりだったのだと思います。一キロしか離れていない二つのガマの選択で生死をさまよいたくありません。

もう二度と同じ過ちは繰り返さないでほしいと心から強く思います。沖縄の人たちはその素直さが裏目に出たのだと思います。アメリカ兵が沖縄に来なければ、こんなことにはならなかったはずだし、七五年前にも今と同じような笑顔があったのかもしれないのです……。

アメリカ兵が来たのは「海」で、対馬丸が出港したのも「海」です。でも、みんなが写真を撮るのも「海」で、泳ぐのも「海」です。そんな凄惨な事実と幸せがたくさんあるという二つの顔を持つのが「海」です。そんな「海」であることを、忘れないでほしいと思います。

非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはいられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝 塚 市

